

橘千蔭の堂上歌壇観―『妙法院宮へ奉れる和歌』を中心に―

高橋 枝里

一、はじめに

橘千蔭（享保二〇（一七三五）年―文化五（一八〇八）年）は、幼時に父枝直に和歌の手ほどきを受け、少年時代から賀茂真淵の門下となって作歌及び国学を学び、晩年には村田春海（延享三（一七四六）年―文化八（一八一）年）と並んで江戸歌壇の指導者として君臨した歌人である（注一）。そのような千蔭の当時の評判と堂上歌壇との交流について、村田春海『織錦斎隨筆』（成立年次未詳）には次のように記されている（注二）。

妙法院宮は、（略）橘千蔭が名たかかかる事をはるかに聞こしめして、寛政のととせの春、一条右大臣東に下り給ふ時、其御ともにまゐれる大舍人頭岡本保考におほせごとたまはりて、千蔭がよめる歌のなかに、山居、閑居などの題なるを奉らせ給ふ。

このように、妙法院宮真仁法親王（明和五（一七六八）年―文化二（一八〇五）年）が、千蔭の評判を聞きつけ、寛政一〇（一七九八）年の春に歌を献上させたことが記されている。田中

康二氏は、千蔭と妙法院宮との交流はこの時が最初であると断定して大過ないと述べている（注三）。これ以降も、千蔭と妙法院宮の交流は続き、千蔭は、妙法院宮から請われて歌を詠んだり、春海と共に『妙法院宮へ奉れる和歌』を献上したりしている（注四）。

そもそも妙法院宮は、当時京都歌壇で大きな影響力を持ち、小沢廬庵や伴蒿蹊らを招いて芸文サロンを形成した人物である。また、堂上歌壇に地下歌人の古学を積極的に取り入れ、堂上歌学の革新をはかろうとしていた。そして、自らの住む御殿の一二の景物を題として地下歌人に歌を求めたのである。それが『妙法院宮御園十二景』であるが、この成立については、田中康二氏の『江戸派の研究』『妙法院宮―『妙法院宮御園十二景』の成立』に詳しい。田中氏はここで、平安和歌四天王、江戸派の千蔭と春海、本居宣長がいつ「十二景」を宮に提出したのかを考察している。しかし、彼らがどのような意識を持ち、歌を妙法院宮に奉ったのかまでは追究されていない。

千蔭は、春海・宣長とともに、妙法院宮サロン以外で『妙法院

宮御園十二景』の歌人に撰ばれた人物である。また、中でも千蔭は、妙法院宮に古風の歌人として一目置かれた存在である(注五)。そのような江戸歌壇を代表する千蔭と、京都歌壇に影響力を持っていた妙法院宮とのつながりを深く知るためには、千蔭がどのような歌を妙法院宮へ献上したのかを探る必要がある。

そこで本稿では、千蔭が妙法院宮へ献上した和歌を手掛かりとして、千蔭の堂上歌壇観を明らかにしたい。

まずは、千蔭が春海と共に妙法院宮に献上した和歌を中心に扱い、千蔭が堂上歌壇に対しどのような意識を持ち、妙法院宮へ和歌を献上したのかを明らかにする。そして、千蔭の堂上歌壇観の特徴と言える和歌を見ていく。『妙法院宮御園十二景』は、妙法院宮が「十二景」の題を指定して歌を求めた歌集であるが、より千蔭の意識を明確にするために、本稿では、千蔭が自ら歌を撰んだ歌集『妙法院宮へ奉れる和歌』を中心に見ていくことにしたい。この『妙法院宮へ奉れる和歌』には、千蔭と春海の和歌が一〇〇首ずつ収められている。春海は、千蔭と同じく江戸派を代表する歌人であり、本稿では千蔭の特徴を明らかにするため、従来千蔭と歌論が似ていると言われてきた春海にも着目し、千蔭との比較を行いたい。春海の堂上歌壇観については、すでに田中康二氏の「村田家と堂上方」によって明らかにされている。田中氏はここで、「地下歌人としての自信と矜持を失うことなく、堂上歌壇に対しては一定の距離を保ちながら、心の中では縣門地下歌人の優位性

を信じて疑わなかったのである。」(注六)と述べ、春海が新古今風和歌の代表として逍遙院三条西実隆と武者小路実隆という、中世から近世前期にかけて古今伝授の中核的系譜を形作る二人の歌風を批判しているところから、春海が堂上歌壇に対して批判的であったとしている。春海の歌論から、春海が堂上歌壇に対して批判的であったことは、田中氏によって明らかにされているが、春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』からは、どのような堂上歌壇観が読み取れるだろうか。また、千蔭と春海とで差異が表れれば、それは千蔭独自の堂上歌壇観と言え、今まで江戸派として一括りにされてきた二人を差別化できるだろう。そして最終的に、千蔭の堂上歌壇観の意味付けを行いたい。

二、千蔭と春海——歌枕意識の比較

これから、千蔭と春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』を中心に取り上げ、二人の堂上歌壇に対する意識の違いや共通点を探る。本節では、千蔭と春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』の中で、歌枕を詠み込んだ和歌に着目し、江戸派の双璧と称され、歌論がよく似ていると言われる二人の歌枕意識にどのような違いがあるかを探る。歌枕意識を探ることで、堂上歌壇の拠点とも言える上方(西国)と江戸派の拠点である江戸(東国)への意識に近づききっかけとなるだろう。

歌枕を詠み込んだ和歌を見る際に、西国の歌枕と千蔭の住む東国の歌枕との、二つに大別して考えたい。西国と東国とを分ける基準は諸説あるが（注七）、本稿では和歌を中心に取り扱うため、和歌の世界観ではどう分けられるかを見たい。そこで、「東」という言葉を『歌ことば歌枕大辞典』（注八）で調べたところ、

東【あづま】

畿内は逢坂の関で果てる。それより東は都とは異なる世界が広がる。

とあり、都と東国との境界は「逢坂の関」であったようである。同じく「逢坂の関」も調べたが、

逢坂【あふさか】

近江国の歌枕。（略）山城国と近江国との境で、そこには奈良時代以来逢坂の関が置かれ、畿内と東国との境界として交通の要地であった。

とあり、「東」と同様のことが書かれていた。また、千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』の中で「逢坂の関」が詠み込まれた和歌は、二首ある。次に、その二首を引用する（注九）。

A 夏旅

あふさかの山路こえ行夏の日はせきの清水ぞ人をとどむる

(二四)

B 駒むかへを見る女車あり

うき名のみ立ののこまも逢坂のせきぢこえぬときけばむつま

じ (五四)

このように、千蔭は「逢坂の関」を「それより東は都とは異なる世界」の入り口であると考えていたことが分かる。また、『妙法院宮へ奉れる和歌』で千蔭が関所として詠んでいるのは、この「逢坂の関」のみである。そこで本稿では、西国と東国との境界を、山城国と近江国との境界である「逢坂の関」としたい。

千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』全一〇〇首のうち、歌枕を詠み込んだ和歌は、三〇首である。そのうち、西国の歌枕を詠み込んだ和歌は一三首、東国の歌枕を詠み込んだ和歌は一四首、西国と東国との境界の歌枕である「逢坂」「志賀山越」を詠み込んだ和歌が三首であった。歌数に着目すると、西国が一三首、東国が一四首で、ほぼ同数であると言える。

一方、春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』全一〇〇首の中で、歌枕を詠み込んだ和歌は一七首であった。一七首を東西に分類すると、東国の歌枕を詠み込んだ和歌が五首、西国の歌枕を詠み込んだ和歌が一二首であり、東国が西国の半数以下しかないことが分かる。

	歌枕を詠み込んだ和歌	東国	西国	境界
千蔭	30首	14首 (46.6%)	13首 (43.3%)	3首 (9.9%)
春海	17首	5首 (29.4%)	12首 (70.5%)	0首 (0%)

このように歌数の上では、春海より千蔭の方が、東国の歌枕を

詠み込んだ和歌を多く献上していることが分かる。

次に、千蔭と春海がどの歌枕を「名所」として詠んだのかを見ていく。「名所」を題とする歌を見ることで、両者の歌枕意識に近づくことが出来るだろう。千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』収録歌の中で「名所」の題で詠まれた和歌は全四首である。以下にその四首を挙げる。

① 名所花

花ざくら霞の袖ぞおほふなるたがきぬぎぬのあさづまの山

(一一)

② 名所春曙

ほのぼのと明行空もむらさきにはほふや春のむさしのの原

(一八)

③ 名所夏月

いせしまや浦の名におう大淀にしばしばよどめ夏のよの月

(二七)

④ 名所擣衣

更ぬるか月はと山に入間路の里のきぬたの声たゆみ行(五五)

①の歌は「あさづまの山」という大和国の歌枕が詠み込まれている。②の歌は「むさしのの原」という武蔵国の歌枕、③の歌は「いせしま」という伊勢国の歌枕、④の歌は「入間路」という武蔵国の歌枕が詠み込まれている。西国の歌枕が詠み込まれた歌は①の一首に対し、東国の歌枕が詠み込まれた和歌は②、③、④の三首

であり、千蔭は東国の歌枕をより多く「名所」として和歌に詠み込んでいることが分かる。

②の題「名所春曙」について、『新編国歌大観』で調べたところ、「名所春曙」の題で詠まれた和歌は、千蔭の歌を含め一首あった(注一〇)。「伏見の里」、「宇治」などの西国の歌枕を詠み込む歌が九首(八一・八一%)。小数点以下第三位以下は切り捨てた)と多い中、東国の歌枕を詠み込んだのは、千蔭の②の歌のほかに一首のみで計二首(一八・一八%)である。その一首は、正徹(永徳元(一三八)年)長祿三(一四五九)年の家集『類題本草根集』(室町末期頃成)の「明けにけりあらしかばの春の花なぎさにかすむしがの山本」(名所春曙・九一)(注一一)であり、「しが」という近江国の歌枕が詠み込まれている。「むさしのの原」と武蔵国の歌枕を詠み込むのは千蔭だけであり、千蔭は「むさしの」を新たな「名所」として詠み込もうとしていたことが分かる。また、④の題「名所擣衣」についてだが、「名所擣衣」の題で詠まれた古歌は、千蔭の④の歌を含め、四二首あった。そのうち、「須磨」や「伏見」など西国の歌枕は二七首(六四・二八%)、東国の歌枕は千蔭の歌を含め七首(二六・六六%)、判別のつかない和歌は八首(一九・〇四%)であった。「名所擣衣」の題で詠まれた和歌も先程述べた「名所春曙」と同様に、西国の歌枕を詠み込んだ和歌のほうが東国の歌枕を詠み込んだ和歌より多いことが分かる。また、「名所擣衣」の題で、千蔭の④の歌のように「入

間路」という歌枕が詠み込まれている古歌の例はなく、千蔭は「入間路」を新たな「名所擣衣」として和歌に詠み込もうとしていたことが分かる。「入間路」の表現については、すでに久保田啓一氏も指摘している。氏は、「入間路」の表現、きぬたを詠み込む点など類例を得がたい。(注一・二)と述べている。この「入間路」という歌枕については、古歌ではすべて「入間」と詠まれ、「入間路」と表現しているのは千蔭のみである。このように千蔭は「入間路」という歌枕を新たな「名所」とするだけでなく、新たな表現も加えて和歌に詠み込んでいるのである。

以上のように、「名所」の題で詠まれた歌に着目すると、千蔭は、『妙法院宮へ奉れる和歌』では東国の歌枕を新たな「名所」として和歌に詠み込んでいることが分かる。

千蔭の場合は、このように東国の歌枕を新たな「名所」として詠んでいることが分かったが、春海の場合はどのような歌枕を「名所」として詠んでいるだろうか。次に春海についての考察を行いたい。春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』収録歌のうち、「名所」の題で詠まれた和歌は三首である。以下に、その三首を挙げる。

⑤ 名所郭公

古郷のならしのをかのほととぎすきならせとやをちかへり
鳴(夏歌・二八)(注一・三)

この⑤の歌には、「ならしのをか」という歌枕が詠み込まれている。この「ならしのをか」という歌枕は『歌ことば歌枕大辞典』

によると『万葉集』の「奈良思の岡」と「ほととぎす」の結び付きは後世の歌に強く影響を与える」とあり、『万葉集』から「ほととぎす」とともに詠む用例はあったことが分かる。また、「ならしのをか」と「ほととぎす」との用例が典型的であるのか『新編国歌大観』で確かめたところ、二〇首の歌が該当した。このことから、「ならしのをか」と「ほととぎす」の組み合わせの歌は、珍しい詠み方とは言えない。

⑥ 名所月

あすかがはあすもきて見む秋の月ななせのよどにかけやどる
比(秋歌・五〇)

⑥の歌には、大和国の歌枕である「あすか」が詠み込まれている。『歌ことば歌枕大辞典』の「あすか」の項には、「月」との組み合わせについては触れられていなかった。そこで「あすか」と「月」との組み合わせは珍しい詠み方であるのかを『新編国歌大観』で調べたところ、一三五首が該当した。辞典には「月」との組み合わせについては触れられていなかったが、古歌ではよく詠まれる組み合わせであると言える。

⑦ 名所雪

あしがらやあしの海づら氷る日ぞ神のみさかに雪はふりける
(冬歌・六七)

この「あしがら」とは、相模国の歌枕である。「あしがら」については、『歌ことば歌枕大辞典』では「月」「雪」「雲」を詠み

込んだ歌が多く見られ」とあり、「あしがら」と「雪」の組み合わせが認められている。『新編国歌大観』でも確認したところ、「あしがら」と「雪」の組み合わせの歌は、四五首あった。古歌にも例があり(注一四)、典型的な組み合わせであることが分かる。

以上、春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』の「名所」の題で詠まれた三首を見てきたが、三首のうち、東国の地名を名所として詠み込んでいる和歌は、「あしがら」を詠み込んだ⑦の歌のみである。春海は、西国の歌枕も東国の歌枕も、典型的な詠み方をしていくことが分かった。

次に、千蔭がどのような和歌を妙法院宮へ提出したのかを探るため、千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』と『うけらが花』の同題詠歌を比較したい。千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』に収められている和歌の一〇〇首中九八首は、『うけらが花』にも収められている。『うけらが花』には、千蔭が詠んだ『妙法院宮へ奉れる和歌』と重複している歌以外にも、同題で詠まれている和歌が複数首収められている。『うけらが花』で複数の和歌が収められている題は、三二題あった。次に、西国の歌枕よりも東国の歌枕を詠み込んだ和歌を献上している例を挙げる。

残雪

かひがねや霞吹とく春風にのこれる雪ぞさやに見へける(四)
この歌には、「かひがね」という甲斐国の歌枕が詠み込まれている。『うけらが花』の中で同じく「残雪」の題で詠まれた和歌は、

次の和歌である(注一五)。

残雪

初瀬女がつくる木綿花ちるばかり檜原がもとに残る雪かな
(春歌・六九)

この歌には、「檜原」という大和国の歌枕が詠み込まれている。「残雪」の題では、千蔭は東国の歌枕が詠み込まれた歌を妙法院宮に献上していることが分かる。同題で西国の歌枕を詠み込んだ和歌と東国の歌枕を詠み込んだ和歌が収められているのは、この「残雪」の題のみであるが、千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』と『うけらが花』の同題詠歌の中で、東国の歌枕が詠み込まれた和歌を献上しているのは三二題中八題で、西国の歌枕を詠み込んだ和歌を献上した三題を上回っている。

『妙法院宮へ奉れる和歌』は、寛政一二(一八〇〇)年の成立で、その二年後の享和二(一八〇二)年に『うけらが花』は刊行された。歌集の成立年を考慮すると、千蔭が『妙法院宮へ奉れる和歌』に収める歌を撰ぶ際に、『うけらが花』の和歌がすでに詠まれていたとは限らない。そのため、西国の歌枕を詠み込んだ和歌と東国の歌枕が詠み込んだ和歌を同時に見比べ、東国の歌枕を詠み込んだ和歌を優先して撰んだとは断定できない。しかし、同題で詠んだ和歌のうち、西国の歌枕よりも東国の歌枕を詠み込んだ和歌が多く撰ばれていることから、東国の歌枕を多く提出しようとする千蔭の意識があった可能性がある。『うけらが花』と比較して、

千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』の方が、より千蔭の東国意識が濃く反映されているのではないか。

千蔭と同様の方法で、春海についても考察したい。春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』と春海の代表的家集『琴後集』（文化七（二八一〇）年刊）に収められている和歌の中で、歌枕が詠み込まれているものに着目し、二つの歌集にどのような傾向の違いが出るのかを考察する。春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』と『琴後集』の同題詠歌を比較し、春海がどのような和歌を妙法院宮へ献上したのかを探っていく。

春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』に収められている和歌の一〇〇首中八八首は、『琴後集』にも収められている。『琴後集』についても、千蔭の『うけらが花』と同じく、『妙法院宮へ奉れる和歌』と重複している歌以外にも、同題で詠まれている和歌が複数首収められている場合がある。春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』と重複している歌のうち、同題の歌が『琴後集』で複数収められている題は、二七題であった。この二七題で詠まれている和歌を、歌枕に着目して比較したい。

二七題の中で、東国の歌枕が献上されているものは三題で、西国の歌枕を献上している題は四題であった。千蔭の場合は、三一題中、東国が献上されているものは八題、西国が献上されている題は三題であり、東国を献上する題が西国を上回っている。春海の場合は西国を献上する歌の方が東国を上回っており、春海は千

蔭とは違い、妙法院宮に東国の歌枕を献上しようという意識がないように思われる。次に、春海が西国の歌枕を詠み込んだ和歌を献上している例を挙げる。

神楽

から神の神のみまへによもすがら大和のことのねもすみけり（冬歌・七〇）

この歌は、『妙法院宮へ奉れる和歌』に収められている和歌である。神の御前で一晚中「大和のことのね」が澄んでいるという歌である。次に、この歌と同題で詠まれた『琴後集』の和歌を用する（注一六）。

神楽

朝倉やあづまの琴の音もそひて霜にすむ夜のおもしろきかな（冬歌・八七八）

この歌は、『妙法院宮へ奉れる和歌』には収められてはいない和歌である。霜で澄んでいる夜に「あづまの琴の音」が添って心が引かれるという歌である。どちらの歌も琴の音の歌であるが、春海は「神楽」という題では「あづまの琴の音」の歌よりも「大和のことのね」の歌を妙法院宮に献上している。このことから春海は、東国に拘りを持っていないことが窺える。

以上のように、春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』と『琴後集』の同題詠歌に着目し、考察を行った。その結果、春海は千蔭ほど東国の歌枕に拘っておらず、東国、西国に関係なく歌を提出して

いることが分かった。

		①『妙法院宮』②①と同題の和と『うけらが花』歌が家集に複数または『琴後集』首収められていとの重複歌数	東国の歌枕を詠み込んだ和歌を献上した題数	西国の歌枕を詠み込んだ和歌を献上した題数
千蔭	98首	31題	8題 (31.80%)	3題 (9.67%)
春海	88首	27題	3題 (11.11%)	4題 (14.81%)

以上本節では、千蔭と春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』の歌枕を詠み込んだ和歌に着目し、両者の歌枕意識を探った。千蔭は、春海と比べ、『妙法院宮へ奉れる和歌』に東国の歌枕を詠み込んだ和歌を多く入首させている。「名所」の題で詠み込んだ歌を見ても、千蔭には東国の歌枕に新しい表現が見られる。また、『うけらが花』よりも『妙法院宮へ奉れる和歌』の方が、東国の歌枕を詠み込んだ和歌が多く入首していることから、『妙法院宮へ奉れる和歌』に千蔭の東国意識が強く反映されていると言えそうである。一方春海は、千蔭と比べ、東国意識の強さは見られない。春海は千蔭ほど東国の歌枕に拘っておらず、西国、東国に関係なく妙法院宮へ提出していると言える。

三、千蔭と春海―「都」観の差異

第三節では、対象を「都」に絞り、千蔭が「都」をどのように和歌に詠み込んでいるのかを探りたい。千蔭にとって、堂上歌壇

の拠点と言える「都」とはどのような存在だったのかを明らかにすることで、千蔭の堂上歌壇観を知る手掛かりとなる。また、春海が「都」についてどのように意識していたのかを探るため、春海の「都」を詠み込んだ和歌にも着目する。そこから、春海の和歌の実作における堂上歌壇観を明らかにしたい。その上で、春海と千蔭との比較を行い、千蔭独自の特徴を見出したい。

まず、和歌で「都」とはどこを指すのかを『歌ことば歌枕大辞典』で確認する。

都【みやこ】

皇居のある都市。帝都。(略) 近世になると「三都」という言葉が生じて、江戸・上方との間で相対化が起こり、「都」も大都市の謂いのごとく変質する。しかし、和歌の言葉としてのそれに変化はなく、(略) 明らかに京都であることは変わらず、(略) 詠まれ続けた。

このように、和歌の言葉として「都」とは京都を指すと記されている。また、本稿で取り上げる「都」を詠み込んだ和歌がどこを指しているか確認したところ、すべて京都を指していたため、「都」は京都を指すものとして考察を続けた。

千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』のうち、「都」を詠み込んだ和歌は、一〇〇首中四首であった。以下に一首ずつ挙げていく。

① 都初春

うちひさす都大路のたてぬきに霞の衣たちそめてけり(一六)

この①の歌は、「都」の初春に、霞が立ち込める様子を詠んでいる。

② 山里に住女鹿の声を聞いて

ちりつもる枕の山のしかの声あはれ都に聞く人もがな(四三二)

この歌は、『うけらが花』にも収められている歌であり、その題は、「棚倉の君のいへにて、山里に住む女鹿の声を聞く」となっている。この「棚倉」は山城国の歌枕であり、西国の地名ではあるが、「都」とは離れたところに詠み手の存在を置いている。

③ 月前遠情

月をまづ待とる国に住なれてかたぶくかたのみやこをぞ思ふ(五〇)

この③の歌は、東国を月がまず初めに昇る所として、傾く方にある都を思うことを詠んだ歌である。この歌については、『近世和歌集』で久保田啓一氏によって解釈がされており、氏はこの歌の「月をまづ待とる国」の頭注に、「上方に比べ東にあつて、月をまず初めに待ち受ける国。即ち江戸のこと。江戸人千蔭らしい江戸自慢の気配が濃厚に伝わる。」とし、脚注では、「千蔭の周辺には大田南畝ら天明期の江戸文芸を高揚に導いた文人が多数存在した。彼らにとつての都は、どこか見おろす対象となっていたようだ。」としている。このように久保田氏は、千蔭にとつて「都」とは、「見おろす対象」であったとしている(注一七)。千蔭はこの③の歌の他に、東国優位の和歌を詠んでおり、その歌は『うけ

らが花』に収められている。次に引用する。

a としのはじめに

あづまちに先くる春の日のかけを雪に待ちとるふじのしば山(七)

b 春風来海上

あけわたる春の潮路の時つ風東路にこそ先かよひけれ(一四)
このように、千蔭は上方に比べ東国が先に春が到来することを詠んでおり、東国を優位に考えていたと言える。『歌ことば歌枕大辞典』では「逢坂」に関する記述に「春が東方から来るという観念から、春も逢坂の関を越えて都へくるという発想も受け継がれていく。」とある。千蔭は、東国が優位に立てる事象を和歌に詠んでいる。次に、「都」が詠み込まれた四首目の和歌を挙げる。

④ としのくれに山よりつま木こりて出たる所

雪ふかきみ山にこれる爪木まであすやみやこに春をしるらむ(八〇)

この④の歌は、詠み手の存在をどこに置いたかは特定が出来ないが、下の句の「あすやみやこに春をしるらむ」と詠んでいることから、「都」とは離れたところに詠み手の存在を置いていると言える。

以上、千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』の「都」が詠み込まれた歌を見てきたが、「都」の情景を詠む①以外は、②、③、④の歌のように、千蔭は詠み手の存在を「都」から離れたところに設

定している。特に③の歌では、詠み手の存在を東国に設定しており、また、東国優位の歌を詠んでいる。考察の結果、千蔭は東国意識が強く、「都」とは距離を置いていたことが言えるのである。ところで、千蔭周辺の歌人が詠んだ歌の中に、千蔭の東国優位の和歌と似た和歌があるので、次に挙げたい。千蔭の父、橘枝直の歌である（注一八）。

春のはじめのうた

先づかすむあづまの春やさす竹の都人にも羨まるらむ（春歌・

一一）

この歌は、先に霞む東国の春を、都の人も羨ましがっているだろうという歌である。東国の方が春が先に来ることを詠んでおり、それを「都人にも羨まる」と言い「都」を持ちだしているところが、千蔭の③の東国に先に月が昇る歌と、東国を優位に考えている点が類似していると言える。また、東国の方が先に春が到来するという千蔭のaの歌の「あづまぢに先くる春」、bの歌の「東路にこそ先かよひけれ」と同様の語彙が使用されている。千蔭の師である賀茂真淵も「東より春にもなふ行くへこそ法の花さくみやこなりけれ」（賀茂翁家集・長歌・四四一）（注一九）と東国から先に春が到来するということを詠んではいるが、真淵の場合には、「都」に花が咲くとして「都」に対して好意的な和歌を詠んでいる。これらのことから、千蔭の東国優位の詠みぶりは、真淵というよりも枝直譲りである可能性があると言えそうである。

次に、春海が「都」についてどのように意識していたのかを探るため、春海の「都」を詠み込んだ和歌に着目する。そこから、春海の和歌の実作における堂上歌壇観を明らかにしたい。その上で、春海と千蔭との比較を行い、千蔭独自の特徴を見出したい。春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』全一〇〇首の中で、「都」に関する題・和歌は五首見つかった。次に、その五首を挙げる。

⑤ 家々翫春

都人春はいとなし花鳥のすさみにたれもとひとはれつつ（春歌・七）

⑥ 初午いなりまうで

いなり山杉のもとつ葉折かざし夕こえ行は都人かも（春歌・

一一）

この⑤、⑥の歌は、「都人」の様子を詠んでいる。

⑦ きさらぎばかり都に行人にわかるるとて

ゆく君をなにかとどめむ春はただわれもと思ふ都なりけり

（春歌・一三）

⑦の歌は、春にはただ私も都に行きたいという気持ちを詠んだ歌である。この歌は、春には都に行きたいという、「都」に対して好意的な和歌であると言える。先ほど引用した千蔭の「あづまぢに先くる春の日のかけを雪に待ちとるふじのしば山」（うけらが花・春歌・七）も、春を賞美する歌であるが、千蔭は東国に優位な詠み方をしているのに対し、春海は、「都」に好意を持つ気

持ちを詠んでいる。「春」と言えば「都」という詠み方をしていくことから、春海は、都優位に考えていると言える。

⑧ 都月

やちまたにすみゆく月の玉すだれこよひかかげぬ高どのもの

し（秋歌・四八）

この⑧の歌は、都の月の美しさを詠んだ歌である。

⑨ 山家夢

をりをりにかよふゆめこそあはれなれうしとそむきし都なれ

ども（雑歌・九八）

⑨の歌は、辛いと背を向けた都だけれどもだんだんと夢で行き来すると趣深いという歌で、「都」を懐かしく思う気持ちを詠んだ歌である。

以上の歌からは、春海は「都」に対して好意的な歌を詠んでいることが分かった。千蔭の「都」を詠み込んだ歌は、詠み手を「都」から離れた場所におき、「都」とは距離を保っていたが、春海は詠み手の居場所に拘っている様子はない。また、千蔭は東国優位に詠むのに対し、春海は「都」に心を寄せる歌を詠み、都優位とも言える和歌を詠んでいる。これらのことから、春海は、東国意識が強いわけではなく、「都」に対して好意的であることが言える。同時に、東国意識が強く、東国に優位な和歌を詠むのは、『妙法院宮へ奉れる和歌』においては千蔭独自の特徴であることが明確になった。江戸派の双璧とされ、歌風は似ているとされている

二人であるが、二人の「都」意識や東国意識にはこのような違いが表われた。両者は江戸派と一括りにするべきではなく、今回の考察で明らかにした違いは、千蔭と春海個々の特徴であると言えることが出来る。

春海の歌論から、春海が堂上歌壇に対し批判的な意見を持っていることは、すでに田中氏によって明らかにされている。しかし、今回の考察によって春海は、和歌の実作において、少なくとも『妙法院宮へ奉れる和歌』に限って言えば、堂上歌壇に対して批判的な態度を示していないということが言えそうである。堂上歌壇と距離を持っていたのは、どちらかと言えば千蔭の方なのである。

四、千蔭の堂上歌壇観

前節までの考察において、千蔭と春海の歌枕意識や「都」観について探った。そして、『妙法院宮へ奉れる和歌』においては、千蔭は東国に拘りを持ち東国を優位に詠み、「都」とは距離を置いていることが分かった。一方春海は、千蔭ほど東国に拘りは持っておらず、東国西国に関係なく妙法院宮に献上し、「都」に心を寄せる歌を詠み、「都」優位に考えていることが言える。本節では、千蔭の堂上歌壇観をまとめる節としたい。

千蔭は『妙法院宮へ奉れる和歌』を、次の和歌で締め括っている。

寄都祝

いにしへの野中ふる道万代に栄えんとてぞあらたまりける
(一〇〇)

このように、千蔭は、「寄都祝」という「都」を祝う歌を置いているのである。この歌についても久保田氏が『近世和歌集』で解釈を施しており、久保田氏はこの歌の脚注に、「古代の道に新たな命を吹きこむことで都の永遠の繁栄を祈る。」と述べている。「都」に距離を置く千蔭が、一〇〇首目に「都」を祝う歌を掲げているのである。この歌の考察の前に、いくつか確認しておきたい。

そもそも、千蔭が「都」に距離を置く理由は何であろうか。それは、千蔭と交流のあった堂上歌人、富小路貞直へ宛てた千蔭の書簡から窺うことが出来る。以下は、「富小路三位貞直卿へ答たてまつる文」の引用である(注二〇)。

千蔭もいかでまうのぼりてよなどおほせ給ふなかしこみうけ給り侍る。さらずとも都へまうのぼり侍らまくおもひわたりつるはわかかりしよりのねぎごとにて侍しを、とにかくにかづらふ事のみ侍るほどに、ややとし高くなりもて行侍りてかしこき山河をこえぬべき利心もなくなり侍れば、ただいたづらに年月をすくい侍りぬ。

ここで千蔭は、千蔭もどうにかして京に上ってほしいと言うのを恐れ多く受け取る。そうでなくても、都へ上りたいと思っていたのは若い頃からの願ひ事で、あれこれするうちに、だいぶ年齢

が高くなってゆき、恐ろしい山河を越えられるしつかりした心も無くなったので、ただ無駄に年月を過ごしてしまつたと述べている。このことから、貞直が千蔭に上京を勧め、千蔭がそれを断っていることが分かる。また、千蔭が一度も上京をしたことがないということも窺うことが出来る。千蔭が一度も「都」を訪れたことがないということが、和歌の実作においての「都」への距離感に繋がっていると見える。しかし、千蔭は東国優位の歌を詠んでいることから、「都」に対する劣等感はなく、むしろ三都の一つと呼ばれ都会になった江戸を、「都」よりも優位に立っていると考え、歌に表現したのである。千蔭は、都に影響されていない江戸人なのである。

ところで、先に引用した「富小路三位貞直卿へ答たてまつる文」のように、千蔭の謙虚な姿勢は、『うけらが花』の自序にも見ることが出来る。そのことが分かる部分を、次に引用する(注二一)。

おのれすでに年たかくなりにたれば、みづからよくえらびおきてよなど、やむことなきかたがたよりねもころにそそのかの給ふを、いなみなむも中々にて、えらび出でむころとはなりぬ。(略) おのが歌のよしあしを見ること、ひとのうたをあげつらふ如くならざれば、ひが歌や多からむと且はおそり且はやさしみおもふものから、ただかしこくさとしすすめしたまふにしたがへるなりけり。かへすがへすも人笑にや

あらむかし。

ここで千蔭は、自分がすでに高齢になったので自分で歌を撰んでおきなさいと、身分の高い方々から親身に勧められるのを、断るのも却って恐れ多くて撰び出そうという気持ちになったという。自分の歌の善し悪しを見ることは、人の歌の善悪を評論するようなことではないので、間違っている歌が多いだろうと、一方では恐れまた一方では恥ずかしく思うから、ひたすら畏れ多く、論し勧めるのに従ってしまつた。重ね重ね人に笑われることであろうよと述べている。このように、千蔭は家集を作つたことに對し、謙虚な態度を示していることが分かる。

ここで、千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』の一〇〇首目の考察に戻りたい。「都」とは距離を置く歌を詠む千蔭が、なぜ一〇〇首目としてこの歌を撰んだのか。それは、『うけらが花』を編纂する際に謙虚な姿勢を示したのと同様の意識からであると考えられる。千蔭は、妙法院宮に對しても、謙虚な姿勢を示そうとしたのである。

しかし、本稿の考察で千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』の和歌からは、千蔭が「都」とは距離を置き、東国を優位に考えているということが明らかになった。千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』全体から窺える千蔭の東国意識の強さを見ると、一〇〇首目に「都」を祝う歌を置いた謙虚さは表向きのものであり、内実は東国の優位性を信じる東国意識の強さが隠れていると言える。

千蔭の堂上歌壇観については、『うけらが花』の自序から分かるように、謙遜の意がまず挙げられるだろう。また、千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』の一〇〇首目に、「都」を祝う歌を置いたことには、堂上歌壇に對する謙遜の意が込められていたということが出来る。しかし、千蔭の堂上歌壇観の特質は、謙遜の意だけであるとは言えない。千蔭が堂上歌壇の妙法院宮へ奉つた『妙法院宮へ奉れる和歌』に、『うけらが花』と比べ、より強い東国意識が込められているということは、千蔭の堂上歌壇観に江戸人としての自尊の念が背景にあることを意味するのである。千蔭は堂上歌壇を認めつつも、江戸を優位に見ていたのである。

五、まとめ

以上本稿では、千蔭と春海の『妙法院宮へ奉れる和歌』の歌枕や「都」を詠み込んだ和歌に着目し、二人の堂上歌壇観を探つた。その結果、東国意識が強く、東国に優位な和歌を詠むのは千蔭独自の特徴であることが明確になった。對して春海は、東国意識が強いわけではなく、「都」に對して好意的で、都に優位な和歌を詠むことが分かつた。江戸派の双璧とされ、歌風は似ているとされている二人であるが、二人の「都」意識や東国意識にはこのような違いが表われた。従来は、江戸派として一括りにされてきた二人ではあるが、『妙法院宮へ奉れる和歌』から二人の堂上歌壇

観の差別化を図ることができた。

また千蔭は、少なくとも『妙法院宮へ奉れる和歌』では、表向きには堂上歌壇への謙遜の気持ちをも、内面では東国意識の強い江戸人としての自尊の念を込めていたことが明らかになった。

千蔭の『妙法院宮へ奉れる和歌』を中心に、千蔭の和歌の傾向を掴み、春海との比較をすることで、千蔭の堂上歌壇観を見出すことが出来た。今後の課題として、千蔭の家集『うけらが花』にも目を向け、詞書等を手掛かりに堂上歌人との交流をまとめ、千蔭の堂上歌壇に対する意識をさらに深く理解したい。また、春海の歌論と実作の堂上歌壇観の差異についても考察する必要があるだろう。そうすることで、近世後期の江戸歌壇と堂上歌壇の繋がりをさらに明らかにできることだろう。

注

一 千蔭については、『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八三年一〇月）、『日本近世人名辞典』（吉川弘文館、二〇〇五年十二月）を参照した。

二 『日本随筆大成』（第一期、吉川弘文館、一九七五年六月）引用の際に、踊り字はひらがな表記に改めた。『織錦斎随筆』の成立年については未詳であるが、『和歌大辞典』（明治書院、一九八六年三月）には、「成立年次未詳であるが、寛政

三 1791年～享和31803年に書いたことが明らかな部分がある。」と記されている。

三 『江戸派の研究』『妙法院宮』『妙法院宮御園十二景』の成立（汲古書院、二〇一〇年二月）。千蔭が妙法院宮へ提出した歌の内容は、百首和歌・御園十二景・自適庵六勝・生白楼六景・閑居山田等自詠歌・長歌一首（含む反歌）である。これらの歌が、千蔭の妙法院宮へ提出した歌のすべてを網羅しているのかどうかは未詳と言わざるを得ない。

四 『妙法院宮へ奉れる和歌』（小浜市立図書館山岸文庫蔵）には、千蔭と春海の和歌が一〇〇首ずつ収録されている。千蔭の識語には、

寛政十二年宮の御内木崎主計をもておほせことにより置る四季恋雑分書てなれどありければ

とあり、寛政一二（一八〇〇）年に妙法院宮へ献上したことがわかる。

五 飯倉洋一「本居宣長と妙法院宮」『江戸文学』第一二号、一九九四年七月）を参照した。ここでいう飯倉氏の「古風」とは、万葉調・古今調のことを指す。千蔭の名が京にまで広まったのは、『万葉集略解』の執筆がきっかけである。また、本論はじめに引用した『織錦舎随筆』の記述からもわかるように、千蔭は寛政一〇（一七九八）年の春に長歌を含む詠歌を妙法院宮に請われて献上した。

六 『江戸文学』（第二七号、二〇〇二年一月）。

七 西国と東国を分ける基準は、諸説ある。『日本大百科全書』（ジャパンナレッジ）には、

東国【あずまのくに】

都（京都）の東の方角にある諸国の総称で東国とも単に東ともいう。文化、言語的に、都を中心とする西部日本との隔たりが大きく、未開、後進の地域とみられがちであった。その範囲は時代や文献で異なり、古代では、関東・東北地方、信濃（長野県）・遠江（静岡県）より東、近江（滋賀県）の逢坂山より東をさす場合があり、中世・近世にはとくに京都からみて鎌倉、江戸をさすこともある。また、へんびな片田舎の意でも用いられた。

とあり、信濃国・遠江国や、近江国の逢坂山より東を指す場合がある。

八 角川書店、一九九九年五月。以下、本論の『歌ことば歌枕大辞典』の記述については、すべてこれによる。

九 小浜市立図書館山岸文庫蔵本による。この本の書名は『奉妙法院宮百首歌』であるが、本稿では統一書名である『妙法院宮へ奉れる和歌』と呼ぶこととする。翻字の際に、濁点を付し、踊り字はひらがな表記に改めた。以下、本論の『妙法院宮へ奉れる和歌』の引用は、すべてこれによる。なお、引

用歌の傍線と（ ）の中の歌番号は、論者が私に付したものである。

一〇 『新編国歌大観』の検索については、「日本文学」図書館（古典ライブラリー）を利用した。以下、本論における『新編国歌大観』の検索にはこれを利用した。

一一 「日本文学」図書館（古典ライブラリー）。

一二 『近世和歌集』（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇二年六月）。以下、久保田氏の解釈の引用は、すべてこれによる。

一三 『妙法院宮へ奉れる和歌』には、千蔭と春海の和歌が一〇〇首ずつ収められているが、千蔭は部立を明記していないのに対し、春海は、春歌・夏歌・秋歌・冬歌・恋歌・雑歌と部立を記している。

一四 『新編国歌大観』では、『洞院撰政家百首』（貞永元（一一三三）年成）の「雪きえぬふじのすそ野を分捨てて夏になり行く足がらの山」（雑・旅五首・一五五一・頼氏朝臣）などが例に挙げられた。

一五 有朋堂文庫、有朋堂書店、一九二七年一月。以下、『うけらが花』の引用は、すべてこれによる。なお、傍線は私に付したものであり、引用歌の（ ）の中の歌番号は、『新編国歌大観』の歌番号である。

一六 注一五所掲書に同じ。なお傍線は私に付したものであり、引用歌の（ ）の中の歌番号は、『新編国歌大観』の歌番号

である。

一七 また、東西を対比するという、和歌における伝統的な発想も影響していると考えられる。

一八 『近代諸家集』（校註国歌大系、誠文堂、一九三四年一〇月）。なお、引用歌の傍線と（ ）の中の歌番号は、論者が私に付したものである。

一九 注一八所掲書に同じ。なお、引用歌の（ ）の中の歌番号は、『新編国歌大観』の歌番号である。

二〇 盛田帝子「富小路貞直宛加藤千蔭書簡——『富小路貞直卿御詠歌並千蔭呈書』翻字と解題——『語文研究』第八〇巻、一九九五年一二月）。なお、引用の際に、濁点を付し、踊り字はひらがな表記に改めた。

二一 注一五所掲書に同じ。なお、引用の際に、踊り字はひらがな表記に改めた。

（たかはし えり・二〇一三年日本語・日本文学科卒）

第八十六号 目次 二〇二二年 三月

落窪の君と阿槽の成長・出世譚としての『落窪物語』

井上 真梨子

『羅葡日対訳辞書』における Caritas の項目をめぐって

—charidade, amor, 「たいせ()」「いんせ()」のありよう—

漆崎 正人

水哉子卷之上譚注(その二)……………名畑 嘉則

二〇一一年度日本語・日本文学科卒業研究(論文)題目